
泥棒に御用心

岡谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泥棒に御用心

【Nコード】

N9381E

【作者名】

岡谷

【あらすじ】

男はベテランの泥棒だ。もう金には困ってはいなかったが男の欲望は収まらずにいた。

「今日も楽勝だったぜ」

そう呟きながら俺は、箱の中にそれらを入れた。

「本当に良い仕事だぜ。はははあ」

笑いが止まらなかった。

俺の名前は秋山潤一。歳は今年で五十二になる。そして、あまり大きな声では言えないが職業は泥棒だ。泥棒にも色々種類があるが俺は空き巣専門だ。誰もいない留守の家に忍び込み金品を盗んで素早く逃げる。これが俺の仕事だ。一応この道十五年のプロだ。確かにリスクは大きいがこんなにやりがいのある仕事はないと俺は思う。

箱の中には今までの仕事の成果がギッシリと入っている。

この箱の中を見た人は誰もが「これだけあればもう一生暮らしていけるだろう？」と言う。確かにこれだけあればなに不自由なく一生を暮していけるだろう。しかし、人間の欲望というものは凄まじいものなのだ。これだけの金があっても、もっともっと欲しくなるのだ。金なんてあり過ぎたって困るものじゃないだろ？だから俺はまだまだ泥棒を続けていくつもりだ。

*

その日も俺はいつものように仕事をしていた。今日の目的は次のターゲットを決めることだ。実はこれが一番大事なんだ。いくら家に忍び込めてもその家に金品がなかったら意味がないからな。

夕方、俺は犬の散歩をしながら様々な家を見て歩いた。

なぜ犬の散歩をしながらなのかはわかるだろ？ 中年のおじさんが一人でウロウロしていたら怪しすぎるからな。もちろんこの犬はこの調査の為に飼った犬だ。

しばらくうつろっているうちに俺は一軒の家にたどり着いた。その家は一見どこにでもありそうな家で、素人から見ればとても金持ちが住んでいる家には見えないだろうが、この道のプロの俺にはすぐにわかる。

「この家は金を持っている」

俺はすぐにその家の観察を始めようとした。しかし、その時、

「うちに何か御用ですか？」

「えっ」

後ろを振り返るとスーパーの袋を手にくら下げた女の人が立っていた。歳は三十の前半ぐらいだろう。なかなかの美人だ。

「あつ、いや。用はないんですが、素敵な家だなと思って見ていたんです」

俺は慌てて嘘をついた。

「素敵な家だなんて。ありがとうございます」

女の人は少し照れながら微笑んだ。

「かわいいワンちゃんですね」

「えっ、あ、ああ」

「わたしもペット飼いたいんですけど、主人が嫌がるんで飼えないんですよ」

「そうなんですか。それは残念ですね」

番犬なし。俺は心のメモ帳にそう書き込んだ。

「まあ、仮に主人が飼って良いって言ってもどっちにしろウチは飼えないんですけどね」

「何ですか？」

「ウチよく旅行に行くんですよ。しかもほとんど海外だから何日も家を空けちゃうんで、もしペットを飼っても困っちゃうんですよね」

「そういうことですか」

ビンゴ！やっぱりこの家は金を持っている。俺は笑みがこぼれるのを必死で我慢した。

「ちなみに今週の金曜日もグアムに行ってくるんですよ」

「グアムですか、良いですね」

よっしゃー！良いことを聞いたぞ。今日は本当についているな。

「はい。あつ、すみません、一方的に話しちゃって。暗くなってきたやつたんでそろそろ失礼します」

「あ、はい。それじゃ」

会釈をして俺は女の人と別れた。

*

金曜日、俺は再びあの家の前に来ていた。もちろん仕事をするのだ。どうやら本当に旅行へ出かけてしまったらしい。家には人に気配がまったくなかった。

「よし、やるか」

俺は気合いを入れ、早速仕事に取りかかった。

・・・そして十分後、俺は無事に仕事をやり終えて家から出た。

えっ？どうやったかって？悪いがそれは企業秘密なんで教えられないんだ。それにしてもスゴイ家だった。もしかしたら今までで一番の収穫かもしれない。

俺はウキウキな気分の家へと戻った。そして、たった今盗ったばかりの金品を箱の中に入れようと箱の蓋を開けた。しかし、それと同時に俺は自分の目を疑った。

「な、なんだこれは？どういうことなんだ？」

俺は目の錯覚かと思い、一度箱を閉め、冷静になってからも一度箱の中を見た。しかし、状況は何一つ変わっていなかった。

「本当にどうなっているんだ？」

つとその時、

・・・ピンポン。家のチャイムが鳴った。

誰だよ。今それどころじゃないんだよ。俺は頭はまだ混乱状態のままだったが仕方なく玄関に行きドアを開けた。

「どうも、秋山潤一さんですね？」

家の前には俺の天敵が二人も立っていた。

「は、はい。そうですけど」

「警察です」

そんなことは言われなくてもわかっている。

「お前を住居侵入罪、器物損壊罪、窃盗罪の疑いで逮捕する」

警察は淡々とそう言った。

とうとうこの日が来たのか……。俺は目の前が真っ白になった。しかし、警察はそんな俺を無視して家の中に入ってきた。

「おい、何なんだよ。勝手に人の家に入ってきて」

「知っているんだぞ。お前が常習犯だってことをな。さあ盗んだものはどこにある？」

「そこにある」と言って俺は潔く箱を指さした。

「随分と貯め込んでいるんだろうな」

そう言いながら警察は箱を開けた。

「ん？これだけか？これはさっき盗んだものじゃないのか？」

警察は眉間にシワを寄せながらそう言った。

「そつだよ」

「そつだよ、じゃないだろ！他のものはどこに隠してある」

「それだけだよ」

「嘘をつくな。早く出せ！」

「嘘なんかじゃないんだ。本当にないんだよ」

それは本当に嘘なんかじゃなかった。俺も未だに信じられないのだが、俺が今まで苦労して盗んできた金品は一つも残らず箱から消えていたのだ。

「・・・それは本当なのか？」

「本当だよ。これから俺は捕まるんだ。なのにそんな嘘をついたって意味がないだろ」

俺は必死に言った。しかし、警察は予想外の事を口にした。

「ちくしょー。ここのやられたのか！」

え？ここもやられた？どどういう意味だ？

「あゝ、それはどういうこと？」

俺は聞いた。

「最近、泥棒を狙う泥棒が出てきたんだよ」

な、なんだと？泥棒を狙う泥棒だと？

「手口はこうだ。まずお前みたいな泥棒を見つける。同業者だから

雰囲気とかでわかるんだろうな。そして、ターゲットの泥棒が目をつけた家の住人になりすまして、事前に調べておいたその家の情報をあえて教えるんだ。ターゲットの泥棒はその情報を信じて空き巣に入る。そして、その隙にターゲットの泥棒の家に忍び込む。家の場所はこっそり尾行でもして知るんだろうな。そして最後に通報をして警察にターゲットの泥棒を捕まえされる」

なんてことだ。それじゃ、あのときの女はあの家の住人じゃなく同業者だったっていつのか？

「でもなんで最後にそんなことをするのか分からないんだけどな。まあ多分復讐されないようにする為か」

警察はそう言った。しかし、俺はそれだけじゃないと思う。

「なあ、一つ聞いて良いか？」

「なんだ？」

「そいつに狙われた泥棒はどんな奴らだった？俺みたいなおっさんか？」

「ああ、そういえばそうだな。みんないい歳をしたおじさんばかりだったな」

やっぱりそうか。ようは世代交代ってやつか。もう俺達の時代も終わりってことだな。

俺は不思議と柔らかい気持ちになっていた。そして素直にこう心のなかで叫んでいた。

頑張れ！若者よ！

（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9381e/>

泥棒に御用心

2010年10月17日07時40分発行